



《インタビュー》

「分断」と「不安」が 支配する現代、そして未来

山田昌弘さん（中央大学文学部教授）

山田昌弘さんの専門は家族社会学。統計の数字からだけでは見えにくい現代社会の現実を、「格差社会」「パラサイト・シングル」「希望格差社会」「婚活」などのキーワードによって、読み解く試みを続けられています。例えば、過去に流行語にもなった「パラサイト・シングル」という概念で、欧米よりも失業率が低く、恵まれているとされた日本の若者たちが、実は親たちの経済力によって支えられていたために、困窮ぶりが数字に表れにくかっただけだという事実を明らかにしました。

子どもの貧困への対応が喫緊の課題だと言われて久しい日本社会。格差社会においては、みんなが困窮していくのではなく、貧困層と中流層に社会が二極化していきます。その「分断」と「不安」のリスクによって、未来はまったく楽観できないと語る山田さん。家族社会学の視点から見えてくる子育て家族の未来についての話をうかがいました。

（聞き手：日本子ども学会事務局長・木下 真）

分断される子育て家族

——日本の家族がさまざまな形で危機に陥っている時代だと思いますが、今後、子育て家族はどのような状況になると予想されていますか。

山田：基本的には二極化ですね。一つの世界ではなくなっている。「中流の子育て生活を維持できる層」と「子育て生活を維持できない層」に確実に分断が進んでいます。その二つの世界への分解プロセスにあるというのが、いまの状況じゃないでしょうか。

（「チャイルド・サイエンス」のバックナンバーを見ながら）、こういう子どもの専門家のみなさんがおやりになられる子どもの教育のための提言というのは、ほとんどが中流層の子どもたち向けなのです。でも、実は、子どもとちゃんと向き合える家庭と、子どもがまったく放置されている家庭と、家庭は二つに分かれ始めているのです。発達障害に関しても、子どもを放置するような家庭に療育のアドバイスをしても実践はできないでしょうね。

——その分断は親の経済力によって生じるということですね。

山田：親の経済が安定しているところで育つ子どもと、親の経済が不安定なところで育つ子どもとの間の差ですね。これは都市でも地方でも同じです。ただ、都市部の方がはっきりしていますけどね。

——地方に行くと、まだ三世代同居も見られます。貧しくても、三世代同居によって、家族が支え合うことで良好な子育て環境を維持することは難しいですか。

山田：中流生活を維持できるような三世代世帯なら可能でしょうけど、いまは祖父母世代も貧困化が進んでいて、下の世代を支えられない祖父母も出てきているわけですから、三世代世帯も二極化するわけです。

沖縄とか東北とか見ると悲惨ですよ。貧困率が高まってきて、もう祖父母の世代もお金がない。20年ぐらい前までは、子育て世代の経済的な弱さを祖父母の世代が支えて成り立っていたけれど、そうもいなくなっている。祖父母が子育て世代を支えられる家族と、支えられない家族との二極分化が起きています。

分断によって生じる希望格差社会

——将来を支えてもらえないと思っている若者たちはどうしていくのでしょうか。

山田：多くは結婚しないで、親と同居し続けたりするわけです。もし結婚すると新たな貧困家族をつくってしまうことになる。生きていくことさえ難しい。そうになると、子どものことなどかまっていたら将来の生活が成り立たないので、離婚も多くなります。将来に希望をもてない家族ですね。自分たちの生活に希望がな

い中で子育てしているわけですから、子どもにも希望はないわけです。

子どもを気遣いながらがんばろうとしている中流家族が、20、30年前はほとんどだったのが、その割合がどんどん低下しています。まさに「希望格差社会」です。子どもを育てることに何の希望ももてない家族が10年前に10%であれば、いまは20%で、将来は30、40%まで増えていくでしょう。「3分の1の世界」と「3分の2の世界」との分断ですね。

—— 先進国はみんなその傾向があると言っているんですか。

山田：正確に言えば、アメリカやイギリス、フランスなどです。ただ、そういう国々は日本と違って、貧困層は移民の家族に多いわけですね。

地域の支え合いの力も弱くなっていく

—— 3分の2の中流層が、格差社会を是正してこうとすることはしないのですか。

山田：「ああは、なりたくない」という不安だけです。福祉が世話すればいいんじゃないかと思いつつ、むしろ、見ないようになっています。貧困問題といいながら、一部のかわいそうな人への福祉としてしかとらえてなくて、社会全体を考えるとという態度が欠けています。中流層のインテリはみんな3分の2を相手にしているのでしょね、はっきり言ってしまえば。

—— この分断を何らかの政策で軟着陸させる方法はないのでしょうか。

山田：税制も含めて、社会保障システムをすべて見直さないといけないでしょうね。

—— いま日本のこれからに関して、「人口減少社会」「単身世帯の増加」などの言葉も踊っていますが、それらは表面的な現象でしかないのでしょうか。

山田：そうですね。単身世帯も、上野千鶴子さんみたいなインテリジェンスがある単身高齢者世帯と、引きこもって無残な生活をしている単身高齢者世帯との分極化が進んでいる。母子家庭もみんな貧困というわけではなく、母親がリッチな母子家庭と、母親がプアな母子家庭が二極化しています。

—— 地域で助け合おう、支え合おうという動きもありますが。

山田：地域の助け合いと言うけれど、貧困地域には助けてもらいたい人しかいません。人助けをしたいと思うゆとりのある人たちがたくさんいる地区ならいいですけど、地域の二極化も進んでいます。

—— 出口なしですね。

山田：私の話は暗いのですよ。暗いというか、そうやってきていますよね、現実には。

「不安」が貧困の質を変えた

—— いまほどでなくても、昔も貧困家庭はありました。そこでも子育てが行われていて、幸せな家庭もあったと思うのですが。

山田：昔は収入が少なくても、生活は安定していたのですよ。貧しいなりの生活があって、収入が少なくても明日の生活にすぐに困ることはない。収入が少なくても安定した収入が見込めるなら、助け合いで支え合うこともできた。

ところが、いまはそもそも生活が不安定になっている。親は、いつクビになるかわからない非正規雇用者なんですよ。同じ貧困でも貧困の質が違う。安定して収入が少ないのと、不安定で収入が少ないのでは、子育て中の親に与える影響はすごい差になります。

放置された子どもは経済的な困窮だけではなくて、学力もないし、コミュニケーション能力も乏しく、道徳心も育ちにくい。将来の職業生活を送るための基礎力が欠けていきます。

—— とすると、豊かな人たちが手を差し伸べるか、救う手立てを考えるしかないですね。

山田：本当にリッチな人は考えると思いますけど、日本はぎりぎりの中流生活を保っている人が大部分です。かつ、それが将来安定していて、これからずっと収入上がるなら心の余裕もあるのですが、いまの日本の中流の人は、いつ転げ落ちるかわからない。そういう人は、下の人たちを支えようとするよりも、見下すことで安心しようとする。

—— それで、生活保護バッシングみたいなことになるのですか。

山田：NHKのニュースウォッチ9というニュース番組で紹介された少女が、スマホを持っていることが後にネットで話題になりました。しかし、中流のものが一つあったからと言って、貧困ではないということではないのです。中流生活を満たすものが全部そろえられないことが問題なのです。スマホをもつために、見えない何かを失っているはずなのです。他人が見て、貧困だと気づかれないようなところから削っていくのです。例えば、食事を減らすとか。そういうことが、バッシングしている人たちはわかっていない。

二つの日本を知ることから

—— 貧困の子どもたちは、自分たちが貧しいことを隠そうとする。孤立していくことにもなりますよね。

山田：昔はほとんどが貧しかったわけですから、一部のお金持ちの子どもと、大多数の貧しい子どもだったのです。バランスが取れていた。いまは、子どもの世

界は5分の4の豊かな子と、5分の1の貧しい子なのです。貧しい子は排除され、無視されてしまう。いまスマホがないと、仲間外れにしなくても、自然と仲間外れになってしまう。連絡手段がないわけですから。

——学校の教師は、そういう分断に敏感でないとやっていけなくなっているそうですね。

山田：それらのことに気づかないといけない時代になってきましたね。でも、いまの貧困の子どもたちは一見ただけでは貧困だとわかりにくい。

——まず大事なのは貧困世帯を知ることですか。

山田：そうですね。たいていの人は貧困層から目をそらしますからね。見えても、すぐにバッシングするし。中流家庭の人は、いままで通り、税金も社会保険料も納めるし、自分で貯金もするし、子どもに高い学力を与えられるし、不安ではあるけれど、基本的にはいままで通りの生活です。しかし、そのような層と分断された形で、貧困層は間違いなく広がっていきます。

——山田さんは、一定の所得をあらかじめ国民に与えるベーシック・インカムの導入を提言されていますよね。

山田：働かない人にお金を出すのはいやだというので、世間の支持は絶対に得られないでしょうけど、それぐらい抜本的な改革が必要でしょうね。

(2016年10月27日／中央大学山田昌弘研究室にて)

〈プロフィール〉

山田昌弘（やまだ・まさひろ）

中央大学文学部教授。1957年生まれ。1981年東京大学文学部卒業。1986年東京大学大学院社会学研究科博士課程単位取得退学。東京学芸大学教授を経て、現職。著書に『パラサイト・シングル時代』（ちくま新書）、『希望格差社会』（筑摩書房）、『ここがおかしい日本の社会保障』（文春文庫）など多数。若者たちの恋愛事情からの社会分析にも定評があり、「婚活」ブームの火付け役でもある。近著に『モテる構造：男と女の社会学』（ちくま新書）、『結婚クライシス：中流転落不安』（東京書籍）。